

会 議 録

会議名 (審議会等名)	美術館検討委員会(第4回)		
事務局 (担当課)	市民活力推進部文化国際課 電話042-769-8202(直通)		
開催日時	平成20年7月24日(木) 14時00分～17時00分		
開催場所	ウェルネスさがみはら7階 会議室4		
出席者	委員	10人(別紙のとおり)	
	その他	0人	
	事務局	6人(市民活力推進部長、文化国際課長、他4人)	
公開の可否	<input checked="" type="checkbox"/> 可 <input type="checkbox"/> 不可 <input type="checkbox"/> 一部不可	傍聴者数	4人
公開不可・一部不可の場合は、その理由			
会議次第	1 開 会 2 議 題 (1)相模原市の美術館は、何を指す美術館なのか。 (2)相模原市の美術館は、何をやる美術館なのか。 (3)相模原市の美術館は、何を収蔵するのか。 3 その他 4 閉 会		

審 議 経 過

主な内容は次のとおり。(○は委員の発言、●は事務局の発言)

1 開 会

相模原市市民活力推進部長あいさつ

2 議 題

- (1) 相模原市の美術館は、何を指す美術館なのか。
- (2) 相模原市の美術館は、何をやる美術館なのか。
- (3) 相模原市の美術館は、何を収蔵するのか。

について、合わせて討議が進められた。

※資料1～4（会議以前に委員に送付済み）について、事務局から説明を行った。また、平成20年6月3日に市文化協会より、市立美術館建設計画に対する要望書の提出があったため、要望書の内容を各委員に説明した。

- これまでの検討委員会で、大まかな方向性はまとまってきていると思う。ここからはさらに、詰めた話をしていきたい。
- 美術館の名前について、資料に『相模原市立美術館』とあるが、美術館の名称は『相模原市立美術館』で決まりなのか。『相模原市立美術館』には箱物的な響きがある。例えば『東京国立「近代」美術館』のように名称に美術館の性格を表してもいいのではないか。
- 美術館の名称について、本市では博物館相当施設としての市民ギャラリーがあるが、「ギャラリー」という施設が、他市では単なる展示施設という意味で使われている場合が多いため、相模原市の市民ギャラリーが単なる展示施設と誤解される場合がある。施設の性格が正しく理解されるために、名称は重要だと思う。
- 現代美術と名称に入れた場合、古美術はやらないのかという話になる。名称によっては、今後の方向性を決めてしまうことになる。
- 「現代美術」は難しい概念であり、また固い印象を与える。例えば、「金沢21世紀美術館」の場合は「現代」という言葉を避け、「21世紀」という言葉でうまく表現している。
- 「現代美術」が、20世紀後半の美術を指す「モダンアート」なのか、現在の社会的な問題などを反映した「コンテンポラリーアート」なのかは、美術館にとって重要な要素だ。その考え方によって美術館が扱う対象、展示方法も変わってくる。
- 新しい表現を目指す若者が増えている一方で、伝統的な技法で表現をしている人もいる。伝統的な美術であっても、現在行われているものはコンテンポラリーアートだと言える。現代美術においても、モダンとコンテンポラリーなアートが、同時進行している。どこからどこまでがモダンで、どこからがコンテンポラリーなのか、色分けするべきではない。

- 「現代美術」をどう捉えるのか、整理しておく必要がある。個人的にはコンテンポラリーという意味合いで扱って良いと思うが。
- モダンアートとしての「現代美術」ではなく、コンテンポラリーアートとして「現在美術」という概念で良いと思うが、美術館の名称として適切な表現が難しい。
- 「美術館」という言葉の響きだけで、自分には無縁だと思ってしまう市民がいると思う。「現代」美術館だとさらに小難しく、敷居が高く感じる。「現在」美術はいい響きだと思う。
- 現代美術館とすると、市民が敬遠してしまうが、「市民美術館」などのように「市民」という言葉がつくと市民が親しみやすい。
- 例えば『相模原市立現代市民美術館』という名称はどうか。
- 名称が中身を決めていくということもある。従来の美術館ではなく、美術館にアートセンター的な役割が必要だと考えているので、名称に反映したいがどうか。
- アートセンターという名称でもいい。ある市の現代美術館は、英語表記が「Art Center」となっていた。
- 美術館の名称については正式名称とは別に愛称をつけるという手もある。
- 美術館の名称も重要だが、まずは「何をする美術館か」等の美術館の事業内容について精査したい。美術館名はここで決定せず、当分の間、仮称としてもよい。
- 世田谷美術館にも美術館の目的等について定めた「要綱」があるが、要綱とは別に、指針が定めてあり、この指針は、かなり具体的で市民の視点に立ったものだ。これが美術館の運営をする上でかなり役に立った。第2回検討委員会の資料で「相模原市市民満足度調査」の概要が配られたが、果たして美術館の構想がその市民の要望に応えられるのか、考える必要がある。
- 美術館が建設されることによって、市民にとってどんな利益があるのか、考えなければならない。美術館が建設されることによって、まちに良い変化が生まれて欲しい。
- 美術館の利用者である市民の視点、市民の感覚からの美術館を考える必要がある。行政から見た美術館像では、市民のための美術館とは言えない。
- 今年度は本検討委員会で検討を頂き、来年度はパブリックコメントを募集し、市民からの意見を集めて、美術館の建設に反映させることになっている。
- 「近現代美術を中心にする」、「若手を支援する」、「まちづくりをする」といった美術館の基本的な方向は出てきているようだが、具体的に何をどうしていくのか？
- 「資料3 何をする美術館か」に「若手作家を支援する」とあるが、若さは年齢の若さだけではない。これから伸びる可能性のある人、情熱や意欲のある人について「若手」と考えて欲しい。

- 若手支援については、若い精神を持った人を支援するという意味で良いだろう。若い精神を持った人であれば、高齢者、障害者も支援対象になる。
- 若手作家支援について、レジデンスの機能を結びつけたいと思う。レジデンスインミュージアムのような形で、作家が動いているのを、来館者が直接が見たり、作家と市民と触れ合えるような時間を作る等だ。美術館にそのような場が作れるか検討したい。
- 美術館にアーカイブ（資料館）的な機能が欲しい。図書館などのように、利用者が常に無料でアーカイブを利用できるようにしておくべきだ。利用者への便宜だけでなく、美術館が研究に用いるうえでも有効だ。アーカイブを用いた研究成果を展示に生かすことも出来るし、研究と展示の両面から情報発信ができる。アーカイブによって全国の美術館と連携することも出来る。
- 美術館の中に多目的なミニシアターを作ればよい。200席程度のミニシアターで、椅子を出したり仕舞ったりできる構造。ミニシアター機能は若い人を支援するならば、必須。映像も美術のツールである。メディアアートであれば美大から作品提携が可能だ。
- この検討委員会でいろいろ意見が出たが、委員の要望の全てを実現することは出来ない。「美術館は何をするのか」について、もう少し絞らざるを得ない。市の財政や美術館の規模が分かれば、ソフト・ハードの両面から、限界が見えてくるはずだ。例えば、1,000 m²を超えるような展示室を持つ美術館であれば学芸員は最低10人必要だ。市の考えとして、美術館の展示スペースの規模は、どのくらいで、学芸員は何人くらいを想定しているのか。
- 美術館建設用地の面積が3600 m²であるので、次回の検討委員会までに、美術館の規模について、大体の規模を示せると思う。
- ワークショップをやる時、水周りが大事。自由に遊べる部屋が欲しい。
- 「資料2 何を目指す美術館か」の「イ 地域の美術館」の部分については異議なし。「ア 相模原市の美術文化を育てる」については、イメージとして、相模原市のアートを育てていくということだろう。子供、学生に限らず、美術を道具にさまざまな教育の場を楽しく提供するのが望ましい。美術品をただ並べて置くだけでなく、なぜ、どういう意図で展示しているか、説明することが必要だ。まさに美術館があるということについて、その存在理由を市民に理解してもらえないようにしなければならない。
- 文化行政全般の中で、美術館をどういう役割にしていくのか取りまとめれば、役割が決まってくるのではないか。やりたいことを全部盛り込むと、美術館が肥大化する一方となる。何かを選んで何かを捨てる必要がある。メリハリをつけることだ。
- 市民が気楽に足を運べるような美術館を作りたい。展示をできるだけ多くの人に

見てもらいたい。例えば、商業施設の中やショーウィンドウに絵や彫刻が飾られてもいいと思う。それには商業施設の協力が必要。

- 相模原市は合併により、都市部と自然が豊かな地域が混在している。自然の顔と都市の顔の両面をもつ市は全国でも珍しいのではないか。絵や彫刻が、まちの中や自然の中に置かれて、環境と一体化すれば、素晴らしいと思う。美術品をただ並べたような「箱物美術館」ではない美術館を作りたい。
- 美術館建設予定地の面積は3600㎡と小さいので、他の施設との役割分担を考え、他との協力をしながら、まちの中で一体的な事業展開ができないだろうか。
- 風っ子展について、大学のキャンパスで展示を行うなど、さらに展示を拡大したい。
- 美術館の中だけ事業を行うのではなく、例えば大学のキャンパスで、学生ボランティアと協力して大学施設を使った事業を行ってはどうか。「オープンカレッジ」や「遊び術（あそ美術）」などの事業ができると思う。美術館の中でばかり事業を行ってはいは限界がある。
- 連携の枠組みがあれば、可能だと思う。学生の力を借りて、ワークショップや展示が出来るのはいいと思う。
- まちづくりについては、まちにある美術館が良いものになれば、まちにいいイメージを与えられると思う。
- 美術館が行うまちづくりについては、アートの生活化、アートの環境化、ビジネス連携が挙げられる。環境化はアートにより環境の充足をすることだ。ビジネス連携は、アメリカなどでは、アートプロモーションとして、館長の重要な仕事の一つとなっている。難しいところはあるが、企業とのタイアップをしていかないと、これからの美術館は成り立たない。
- アートは、人間が今の時代をどう捉え、どう活動していくかを表現している。長期的に見れば、まちのデザインについて美術館がリードするのが望ましい。都市デザインも美術であり、美術がまちづくりに反映されるべきだと思う。
- 都市デザインも含めて、今行われている美術は全て、ある意味で、コンテンポラリーアート（現代美術）であり、アートを広く捉えたほうがいい。美術を狭く捉えると、美術館で対象とする分野も狭まってしまう。
- 美術館で扱う「アート」を狭く限定しないで、デザインの分野も取り込むといいと思う。ミュージアムショップやレストランが充実している美術館は、美術館全体としても活気がある。美術館が衣食住、レストランやショッピングと結びつくことが必要だ。週末、レストランでゆっくりするというようなライフスタイルの提案に力を入れてもいい。
- レストランに最初に力を入れたのは世田谷美術館だと思うが、最近の美術館は、レストランに力を入れているところが多い。美術館の居心地の良さを演出するこ

とが大切。

- 美術館にどれだけ来館者が来るかよりも、利用者がどれだけ美術館に滞留するかということも重要。利用者の立場に立って、利用者にとって居心地の良い美術館にするべきだ。
- 美術館に子供を対象にしたショップなどがあってもよいと思う。
- 美術館の隣が公園ならば、公園も含めて総合的に建設計画を考えてはどうか。
- 「資料3 何をする美術館か」について、もっとまとめた方がいい。「3 教育活動」、「5 情報の収集と提供」、「6 他の機関との連携」の3項目をまとめたほうが良い。「4 まちづくり」と「7 公園機能」についても纏めてよいと思う。
- 美術館を考える上でのキーワードは「まちづくり」だと思う。美術館はある意味での「斡旋業」のような役割が可能だ。学芸員は美術に関する専門家なので、市民のニーズに応じて、相談に乗ることもできるし、その分野の専門家を紹介したりできる。また、斡旋という意味では、美術館と他の施設との連携において、単に美術館と他の施設で共同の事業を行うのではなく、全く違う施設・団体同士を美術館が仲介して、新たな事業を展開するということが可能だ。
- 美術館が文化の仲介を行う、斡旋業的な立場となればおもしろい。
- 美術館をコミュニケーションツールとする。コミュニケーションの場とすることが大切だ。
- 風っ子展が始まって30年になるが、美術館で子供たちの作品を集めた展示ができれば素晴らしい。企画展で見ると人の心に残るものがあれば良い。美術館は、単なる貸し館ではなく、自主的な企画をすることが重要。
- 市が美術館に、どういうコンテンツ（中身）を用意できるのか。美術館で何をするかについて、内容をはっきり決めておくべきだ。自主企画展をやるのはいいが、質の良い企画展を続けていくのは、実は大変難しいことだ。展示を全て自主企画展で埋められないのが多くの美術館の実情。
- 資金不足から貸し館をしている美術館もある。スポンサーからの補助など、運営資金がどのくらい集められるかが課題だ。貸し館について、反対する意見もあるだろうが、財政的な面から、貸し館無しでは成り立たない実情がある。相模原市の美術館に貸し館が必要か議論したい。
- 日金工から3億円を建設費として寄付してもらえとのことだが、美術館を運営する基金として活用できないか。また、ファンドなどにより民間の資金を集めることなどを検討してはどうか。
- 相模原には、市民ギャラリーがあるので、貸し館はそちらで行うという考え方もあるが、世田谷美術館では貸しギャラリーと企画展が近くで実施されている。市民はギャラリーで展示するより、美術館で展示したい気持ちがある。
- つまらない企画展より、素晴らしい貸し館という考え方もある。

- 市民ギャラリーで学生企画展を実施しているが、これは良い企画だ。外部と連携して良い企画展を実施するのもいいと思う。
- 美術館は学芸員が重要だ。企画力のある良い学芸員がいれば、良い展示をして人が集められる。
- 学芸員が力を発揮できる環境でないといけない。また、学芸員は豊富な経験を持った人がいい。
- 学芸員を育てるのは10年かかる。若い学芸員ばかり集めてもだめ。マネジメントできる人を集めるべき。
- 教育連携について、館長には哲学を持った人、学芸課長には実務が出来て、人脈がある人が必要だと思う。学芸セクションは、40%をキュレーターにして、残り60%をオルタナティブ（中間的）な自由度のある職員にしてはどうか。学芸スタッフの中に小中学校の美術教員を教育担当として、ローテーションで、常に1人入れておくのはどうか。
- 教育普及は重要だが、何かもっと明快な方向性が必要。若手作家だけでなく、美術全体の支援をしてもいいと思う。
- 3美大の他、相模原市の内外に大学が多くあるが、学芸員実習をする場が少ない。学芸員を育てる美術館があっても良い。相模原市で育った学芸員が全国で活躍することになれば素晴らしい。
- 賛成だ。美術の発展に「学芸員」の役割は重要。学芸員が美術の振興を支えている。市民ギャラリーの学生企画展はいいと思う。ぜひ「何をする美術館か」に学芸員の育成を加えて欲しい。
- 学芸員を教育するには、専門の学芸員が付くことになる。良いことではあるが、非常に労力が必要で、仕事量的に課題があるかもしれない。しかし、できるところから手をつけていけば、魅力的な分野であると思う。
- 議論が深まり、美術館の核心に迫ってきていると思う。次回までに、市側でかなり具体的な線で素案をまとめさせて頂きたい。早めに資料を送付する。

3 その他

第4回検討委員会の日程調整を行い、10月9日（木）9：30から相模原市民ギャラリー会議室にておこなうこととなった。

美術館検討委員会委員出欠席名簿

	氏 名	所 属 等	備 考	出欠席
1	生 嶋 な ぎ	公募委員		出席
2	石 野 克 彦	公募委員		出席
3	稲 木 吉 一	女子美術大学	教 授	出席
4	上 條 陽 子	市民の美術館を考える会	代 表	出席
5	清 水 哲 朗	東京造形大学	教 授	出席
6	陶 山 定 人	相模原芸術家協会	会 長	出席
7	高 橋 直 裕	世田谷美術館	学芸員	出席
8	原 田 光	元横須賀美術館副館長		欠席
9	古 田 亮	東京藝術大学	准教授	出席
10	松 本 美代子	市立緑ヶ丘中学校	校 長	出席
11	森 脇 裕 之	多摩美術大学	准教授	出席